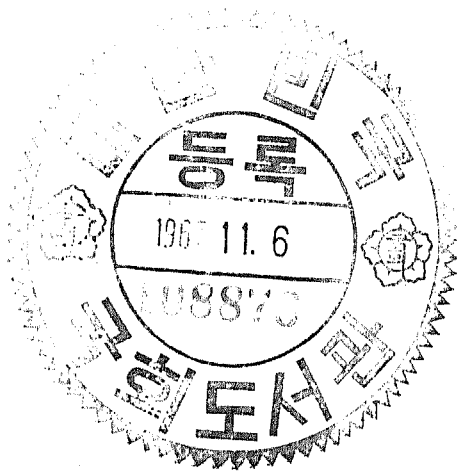


朝鮮總督府

濟生院事業要覽

昭和拾參年



昭和拾參年 朝鮮總督府濟生院事業要覽

凡 例

本書は昭和十三年三月末日の調査を基礎とし朝鮮總督府濟生院に於ける施設經營の概況を記述し以て此種事業經營の參考に資し併て一般視察觀覽者の便に供せむことを期せるものなり

昭和十三年七月

朝鮮總督府濟生院

昭和拾參年 朝鮮總督府濟生院事業要覽目次

第一章 沿革 一頁

第二章 設備狀況 四

一、養育部 四

二、盲啞部 五

第三章 事業狀況 六

一、總說 六

二、養育部狀況 七

 (イ) 收容 七

 (ロ) 保育 七

 (ハ) 教育 六

 (ニ) 實習科院兒ノ指導訓練 九

 (ホ) 退院 三

目次 一

三、盲啞部狀況……………	三
(イ) 入學……………	三
(ロ) 教育……………	四
(ハ) 給費の狀況……………	四
(ニ) 卒業者狀況……………	五

第四章 經理……………	五
-------------	---

一、收入……………	五
二、支出……………	五

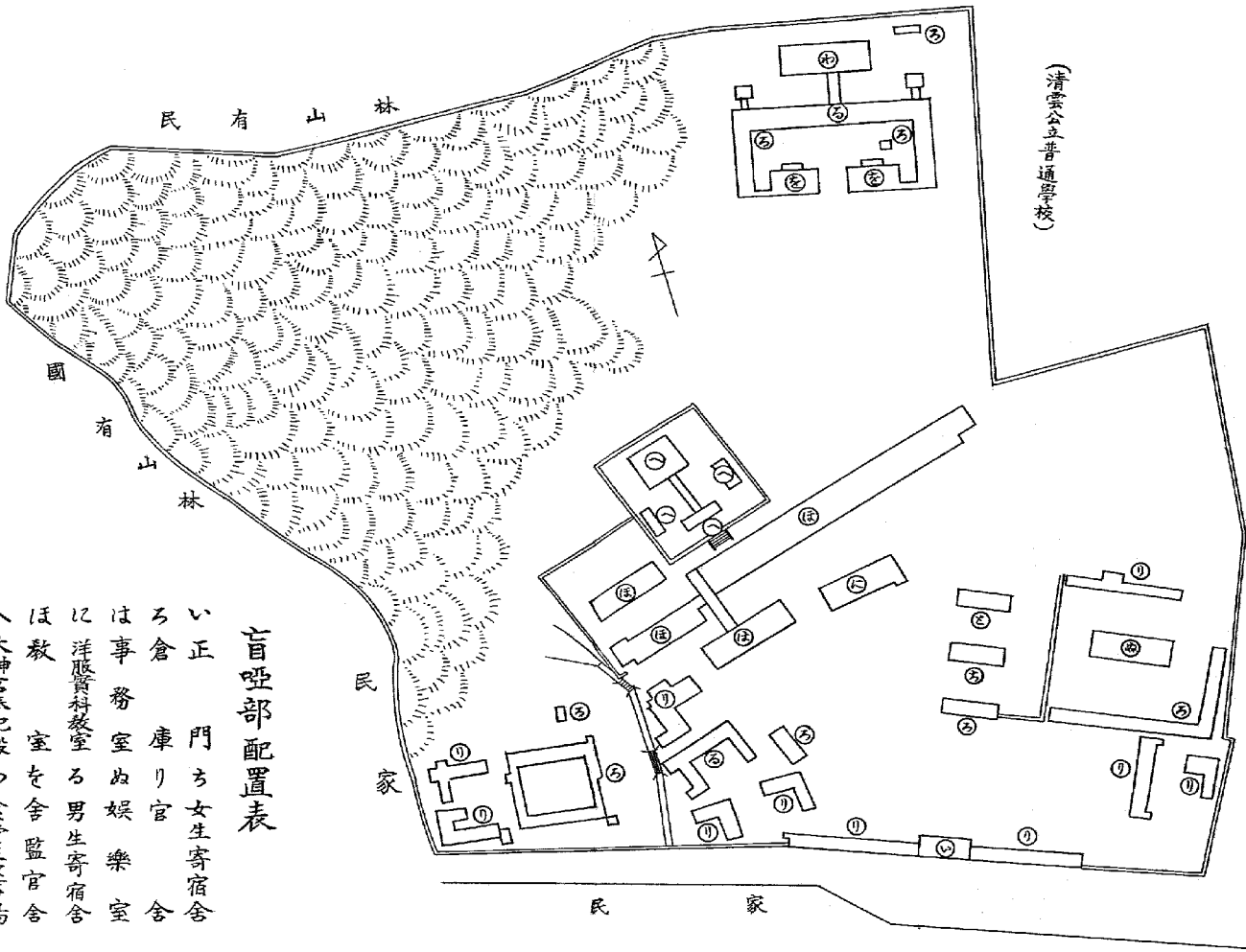
第五章 關係諸規程……………	六
----------------	---

一、朝鮮總督府濟生院官制……………	六
二、朝鮮總督府濟生院規則……………	七
三、濟生院養育部孤兒收容に關する件……………	七
四、朝鮮總督府濟生院從業給與金規程……………	七
五、同 施行規則……………	七

朝鮮總督府濟生院盲啞部配置圖

(縮尺一千二百分一)

(清雲公立普通學校)

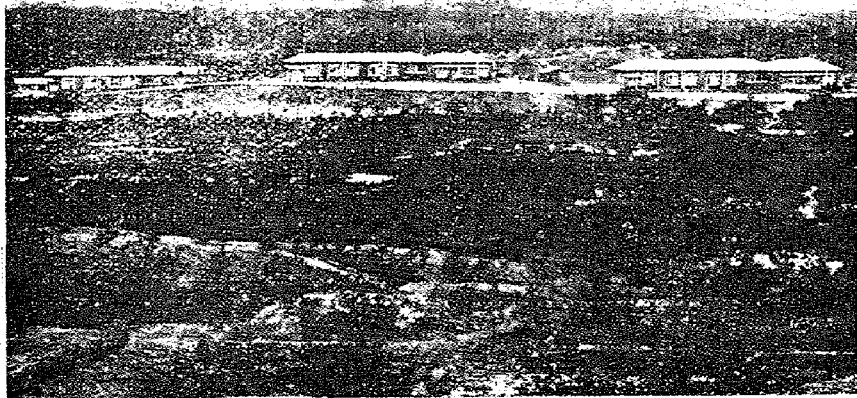


盲啞部配置表

- い正 門方女生寄宿舎
- ろ倉 庫り官舎
- は事務室ぬ娛樂室
- に洋服資料教室る男生寄宿舎
- ほ教 室を舎 監官舎
- へ大神宮奉祀殿わ食堂及炊事場
- と板金資料教室

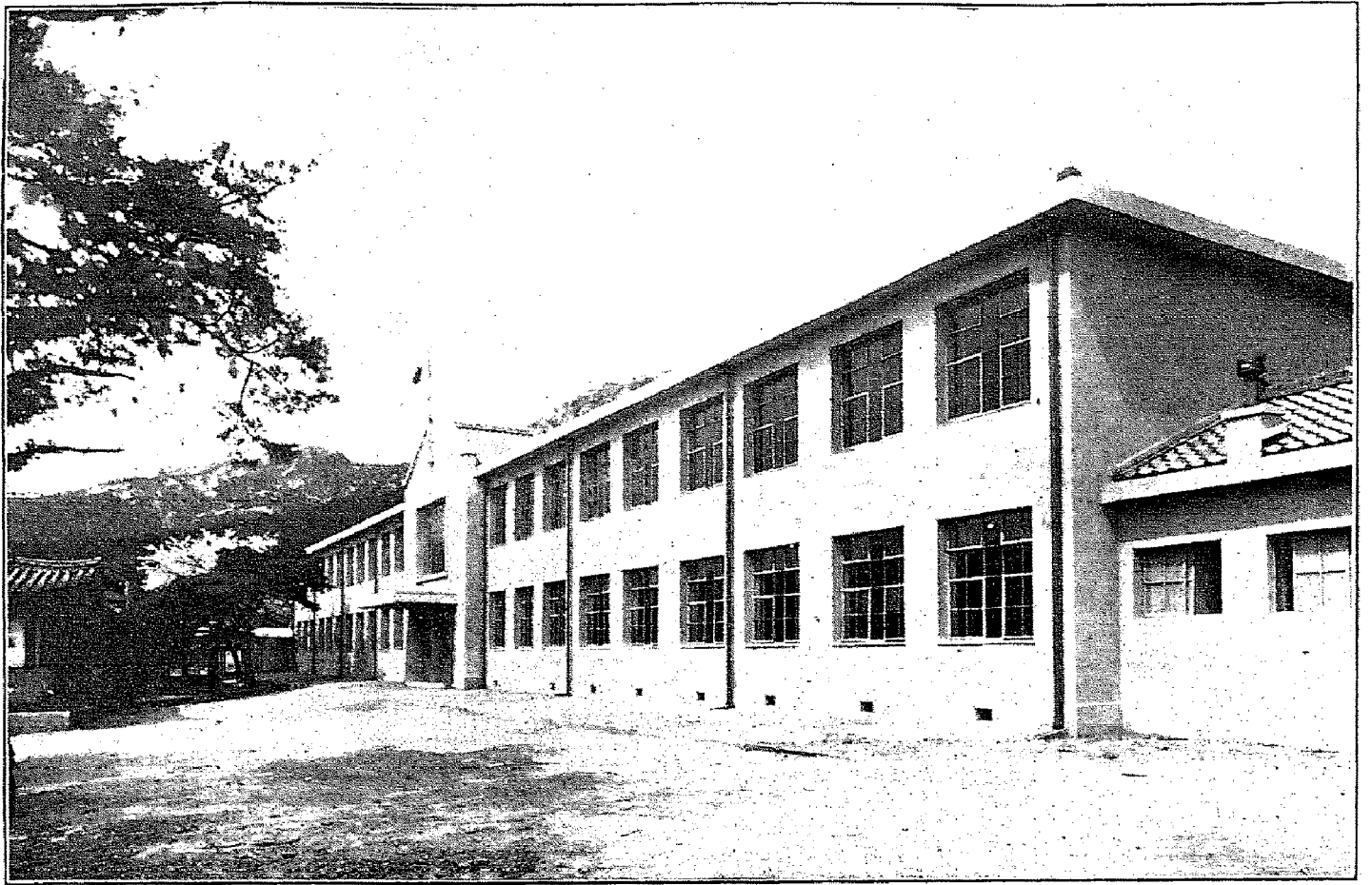
養育部全景

(廳舍及實習科寮舍其他)



(學習科寮舍)





盲啞部校舍

昭和拾參年 朝鮮總督府濟生院事業要覽

第一章 沿革

併合前朝鮮に於ける孤兒の養育に關する施設は極めて少く外人が布教の傍經營せるもの二三を數ふるの外朝鮮人の事業としては唯一の京城孤兒院ありたるのみ。

京城孤兒院は李崧和なる者の創始せる所にして、當時九十餘名の孤兒を收容しつゝありたりと雖基礎薄弱にして經營困難を極めたり。

明治四十四年六月朝鮮總督府は府令第七十七號を發布して濟生院を設立し、孤兒の教養、盲啞者の教育及精神病者救療の事業を行はしむることゝなるや京城孤兒院は其の經營を擧げて濟生院に託せんことを請願せるを以て、其の願意を許容し、孤兒全部を濟生院に收容し同年九月一日より其の教養事務を開始し、養育部と稱せり。

當時濟生院の基本財産は、明治四十四年六月特に下賜せられたる臨時恩賜金五拾萬圓及別に國債報償金の殘餘金拾壹萬參千百五拾九圓を併せて之に充當し、事業に要する經費は該基金より生ずる收入、國庫補助金及寄附金を以てせり。

次で同年八月更に朝鮮に於ける貧民救療資金として、恩賜金貳百八拾五萬五千八百圓の下付ありたるを以て濟生院に於て有する資金は合計參百四拾六萬八千九百五拾九圓に達せり。

同四十五年二月濟生院は當初の事業の一たる精神病者救療事業を總督府醫院構内に開始し醫療部と稱せり同年四月初旬

總督府濟生院官制發布せられ、同時に總督府醫院、道慈惠醫院並總督府濟生院を以て組織せる一の特別會計法の發布を見たり、仍て前に府令に依り設立せる從來の濟生院は單に資金を有するに止め、其の資金より生ずる利子收入は擧げて之を右の特別會計に寄附し、一部は貧民救療の資に一部は總督府濟生院事業の經費に充つることとし其の養育部及醫療部の事業全部は其の儘官廳たる總督府濟生院にて承繼せしが同年十二月に至り盲啞教育事業の開始を爲し、翌年四月より新學期の授業を始めたり。

大正二年四月に至り同一目的を有する二箇の機關、即ち資金を擁するのみにして事業を營まざる從來の濟生院と、之に依り寄附を受けて事業を營む總督府濟生院とを並存せしむるの必要なきを認め明治四十四年府令第七十七號により設立せる濟生院は其の有する資金の全部の用途を指定し前記特別會計に寄附して解散したり、之と同時に總督府濟生院が從來の濟生院より引繼經營し來れる醫療部の事業は更に之を總督府醫院に附屬せしめ、總督府濟生院は専ら孤兒及盲啞者の教養のみを掌ることゝなれり、而して大正十四年に至り三月二十八日附法律第十九號を以て朝鮮醫院及濟生院特別會計法は大正十三年度限り之を廢止せられ朝鮮醫院及濟生院特別會計に屬する資金、歳入殘餘及債權債務は之を朝鮮總督府特別會計に歸屬せしめられたり。

一 養育部

一、明治四十五年四月、京城西大門外獨立門通り舊崇義廟の跡に於て孤兒教養事務を開始せり。

一、同年十二月、朝鮮に於ける盲啞者の教育の必要あるに鑑み本院が盲啞教育を開始せらるゝに及び京城府新橋洞

元宣禮宮に大修繕を加へ茲に移轉せり。

一、大正二年四月、院兒の教養は農業の實習に依り其の徳性の涵養、訓練を爲すを以て策を得たるものと認め、京畿道楊州郡蘆海面孔德里に附屬農場を設立せり。

一、大正四年四月、從來の四學年制度の院內普通科は三學年制度に改正せられ専ら實科(農業)に重きを置きたり。

一、大正十一年四月、朝鮮公立普通學校令改正に伴ひ之に順應し六學年制度の教育を採用すると共に幼稚園を併置したり。

一、昭和五年六月、特殊の事情なき限り委託家庭に於て院兒を個別的教養を爲すこと效果的と認め、從來の里預け制限年齢滿五歳を滿十二歳に延長したると共に學齡兒童は院外の公立其他の普通學校に通學せしむることを原則とせり。

一、昭和六年四月、院內教養を院外に進展せしめたる結果、其の設備は擴大に過ぎたるを以て盲啞部と位置の交換を行ひ京城府天然洞九十八番地(元盲啞部)に移れり。

一、昭和八年十一月、院內教養兒童に對しては市井の雜沓を避け幼少時代より田園生活の雰圍氣に入れ大自然の風物に接觸せしめ情操と勤勞精神の陶冶を期し、其の將來に確實なる生活の基礎を得せしめ、延ては忠良且つ勤勉なる自主的農民の養成を目的とし同年六月京畿道楊州郡蘆海面孔德里附屬農場地域内に廳舎其他の建築に着手し同年十一月竣工し茲に移轉すると共に教育に對しては四學年制の特殊教育を施すこととし、同年十二月八日、兒童の入所式を行へり。

一、昭和九年五月十一日、本部廳舎其他の新築落成式を舉行せり、當日は宇垣總督閣下、渡邊學務局長、松本京畿道知事の兩閣下其他高官有志九十餘名の來賓あり。

二 盲啞部

- 一、大正二年四月、京城西大門外養育部跡（元崇義廟）の建物に大修繕模様替を加へ盲啞者の教育事業を開始せり。
- 一、大正十年四月、啞生の實科として洋服裁縫科を設置したり。
- 一、昭和六年四月、事業の進展に伴ひ設備狹隘を感じたるを以て養育部との位置交換を行ひ建物に模様替修繕を爲し大いに面目を一新せり。

- 一、昭和六年四月、啞生に對する實科は洋服裁縫の單科にては不適當なることを認め板金科（鍼力細工）を設置したり。
- 一、昭和八年十二月十三日、宇垣總督閣下當部を視察せり。
- 一、昭和十三年六月校舎、寄宿舎其他の新築落成を告ぐ。

第二章 設備狀況

一 養育部

所 在 京畿道楊州郡蘆海面孔德里二十一番地
宅 地 一町六段三畝二歩

建 一 坪 五百二十七坪三合

番 田 九町四段五畝二十六步

未墾地林野其の他 百八十九町七段二畝一步

養育部は京城を東北に距ること三里二十二町、泰・康陵森林の一部に接し未墾地林野地を合せ約二百町歩の大地域を劃せり。建物は大神宮祠、教室及事務室、作業室、炊事室、倉庫及七戸の院兒寮舎、納舎、牛舎、兎舎、鶏豚舎等を附設せり、是等の建物は丘陵緩く圍み、溪流後を周り、老松の間に點在し、附近部落と相離れて別に一境地を形れり、耕地は未墾地の一部を開墾し、溜池、溝渠、堤防等の必要なる構築を了し、用に臨み熟田を得るの施設を整へ、就業兒童の増加と共に爾來年々増耕し、目下番及田等九町四段五畝二十六歩の耕作を試みつゝあり、林野地は其の一部僅に林相を呈するも多くは禿山にして荒廢甚しきものあり、之等に對しては既に砂防植林を施行せり。

本部の地域は當初、泰・康陵の附屬地として禁養せられたる林野なりしが、本院農場開始の必要に際し、其の一部を分割交付せられたるものにして、鬱蒼たる陵墓森林地域と相竝べるを以て用水潤澤にして最も農耕地に適せり。

二 盲 啞 部

所 在 京城府新橋町一番地

敷 地 一萬四百七十六坪

建 坪 九百八十坪八合五勺

總督府濟生院盲啞部は京城府新橋町一番地にあり、舊宣禧宮にして建坪五百八十七坪餘、周圍は石塀を以て圍まれ遼然一境域を劃して市塵を隔つ、構内廣濶にして北方に松樹繁茂せる丘陵を負ひ、南面せる高燥の地域なるを以て日射、通風等衛生上好適の地たり。

今後必要に應じて事業の擴張を爲すに尙十分の餘地あり現在主なる建物は大神宮奉祀殿、事務室、講堂、教室、作業室、寄宿舎、食堂、浴室、倉庫及職員官舎等とす。

第三章 事業狀況

一 總 說

本院は現時二種の救恤事業を經營せり、一は孤兒の教養にして他は盲啞者の教育なり。而して前者即ち養育部は事業開始後既に二十六箇年、後者即ち盲啞部も亦二十五箇年の歳月を経過し、各當初豫定せる所の企劃は略々其の施設を了し、事業の根柢概ね成れり、昭和十二年度末の現況を以て前年度末に比する時は孤兒の收容數に於て二名を増し總員二百九十三名を算すると共に事業開始後の總救助人員は實に一千四百三十八名に達せり、又盲啞部に於ては事業創始以來昭和十三年三月末日迄に首二百十三名啞百五十八名の卒業生を出し現在員百四十四名なり、然れ共本院事業は何れも其の效を一朝に期すべからざるは勿論其の經營の困難尠からざるものありと雖幸に事業は着々として豫定の業程を進みつゝあり。

二 養育部 狀況

(イ) 收容

本養育部に收容せらるゝ者は孤兒、棄兒、迷兒其他父母入監者の携帶兒等にして創業明治四十五年四月以來本年三月末迄に取扱ひたる救養兒童總數は實に一千四百三十八名に達せり、而して事業創始當時舊濟生院より引續收容せるもの七十八名を控除せる他の一千三百六十名は二十六箇年に亘り新に收容せる者に係り毎年平均五十二名強を收容し來れり。

昭和十二年度末即ち昭和十三年三月末に於ける現在院兒數は二百九十三名にして前年度末の現在院兒數二百九十一名に比すれば二名の増加なり、而して前掲二百九十三名中男百四十四名女百四十九名にして前年度に比すれば男に於て三名を増し女に於て一名を減せり。

各年度中に於ける新收容兒數及年度末現在數を表記すれば左の如し。

各年度末現在員表

年 度	前年度越人員	新收容兒數	計	減 員	差引	現在年度員數
大正元年度		一〇六	一〇六	三五		七〇
大正二年度	七〇	三六	一〇六	三〇		七六
大正三年度	七六	五二	一二九	三〇		一〇九
大正四年度	一〇九	四七	一五六	三八		一二八

第三章 事業狀況

昭和十二年年度	昭和十一年年度	昭和十年年度	昭和九年年度	昭和八年年度	昭和七年年度	昭和六年年度	昭和五年年度	昭和四年年度	昭和三年年度	昭和二年年度	昭和元年年度	大正十四年度	大正十三年度	大正十二年度	大正十一年度	大正十年年度	大正九年年度	大正八年年度	大正七年年度	大正六年年度	大正五年年度
計																					
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
二九一	三三三	二八四	二六〇	二五七	二八八	二八三	二四三	三三七	一九九	一九三	一七七	一六〇	一八二	一三三	一三〇	一四〇	一六七	一三六	一六〇	一四九	二二八
一四三八	三三	三三	六七	五三	一三	八〇	九八	八八	八六	七五	八七	七七	五九	三五	三七	二四	四六	八〇	一一	五七	五三
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
三三三	三五五	三五二	三二五	二八九	三〇二	三六三	三四一	三〇八	二八五	二六八	二六四	三三七	一九七	一六六	一五七	一六四	二二三	二二六	一六一	二〇六	一八〇
二四五	二〇	六四	二八	三二	二九	四四	七四	九〇	六五	六九	七二	六〇	三七	二八	三六	四四	七三	四九	三五	四六	三三
二九三	二九三	二九二	三三三	二八四	二六〇	二五七	二八八	二八三	二四三	三三七	一九九	一九三	一七七	一六〇	一八二	一三三	一三〇	一四〇	一六七	一三六	一四九

備考 大正元年度新收容者一〇六名中には舊濟生院より引繼收容せる七十八名を含む、大正七年度の一名は物價昂騰し經費の關係上收容を謝絶したるによる、翌八年度の八〇名は豫算を増加し前年度中の者をも併せて收容したるものなり。

又昭和七年度新收容の十三名に減少せる事由は一般的經費節減せられたる結果豫算の關係上收容を餘儀なく謝絶したるに依る。

昭和十三年三月末に於ける現在收容兒一九三名を内鮮人及男女別に區分すれば左の如し。

内鮮人及男女收容區分表

區分	内地人		朝鮮人		合計	
	男	女	男	女	男	女
養育部						
學習料			五五		五五	
實習料			三〇		三〇	
盲啞部委託			一		一	
里預中の者			五三	一四九	一〇六	一四九
依託就業中の者			六		六	
計			一四四	一四九	二九三	二九三

從來收容せる者の多くは朝鮮人にして内地人の孤兒は極めて少數なり、今各年度に收容せる兒童に付内鮮人及男女別に表示すべし。

各年度別收容區分表

第三章 事業狀況

年 度 別	内 地		計 人	朝 鮮		計 人	合 計	
	男	女		男	女		男	女
昭和六年度			一	三	五	八	三	五
昭和七年度				四	五	九	四	六
昭和八年度				三	五	八	三	六
昭和九年度				三	五	八	三	六
昭和十年度				三	五	八	三	六
昭和十一年度				三	五	八	三	六
昭和十二年度				三	五	八	三	六
昭和十三年度				三	五	八	三	六
昭和十四年度				三	五	八	三	六
昭和十五年				三	五	八	三	六
大正十六年				三	五	八	三	六
大正十七年				三	五	八	三	六
大正十八年				三	五	八	三	六
大正十九年				三	五	八	三	六
大正二十年				三	五	八	三	六
大正二十一年				三	五	八	三	六
大正二十二年				三	五	八	三	六
大正二十三年				三	五	八	三	六
大正二十四年				三	五	八	三	六
大正二十五年				三	五	八	三	六
大正二十六年				三	五	八	三	六
大正二十七年				三	五	八	三	六
大正二十八年				三	五	八	三	六
大正二十九年				三	五	八	三	六
大正三十年				三	五	八	三	六
大正三十一年				三	五	八	三	六
大正三十二年				三	五	八	三	六
大正三十三年				三	五	八	三	六
大正三十四年				三	五	八	三	六
大正三十五年				三	五	八	三	六
大正三十六年				三	五	八	三	六
大正三十七年				三	五	八	三	六
大正三十八年				三	五	八	三	六
大正三十九年				三	五	八	三	六
大正四十年				三	五	八	三	六
大正四十一年				三	五	八	三	六
大正四十二年				三	五	八	三	六
大正四十三年				三	五	八	三	六
大正四十四年				三	五	八	三	六
大正四十五年				三	五	八	三	六
大正四十六年				三	五	八	三	六
大正四十七年				三	五	八	三	六
大正四十八年				三	五	八	三	六
大正四十九年				三	五	八	三	六
大正五十年				三	五	八	三	六
大正五十一年				三	五	八	三	六
大正五十二年				三	五	八	三	六
大正五十三年				三	五	八	三	六
大正五十四年				三	五	八	三	六
大正五十五年				三	五	八	三	六
大正五十六年				三	五	八	三	六
大正五十七年				三	五	八	三	六
大正五十八年				三	五	八	三	六
大正五十九年				三	五	八	三	六
大正六十年				三	五	八	三	六
大正六十一年				三	五	八	三	六
大正六十二年				三	五	八	三	六
大正六十三年				三	五	八	三	六
大正六十四年				三	五	八	三	六
大正六十五年				三	五	八	三	六
大正六十六年				三	五	八	三	六
大正六十七年				三	五	八	三	六
大正六十八年				三	五	八	三	六
大正六十九年				三	五	八	三	六
大正七十年				三	五	八	三	六
大正七十一年				三	五	八	三	六
大正七十二年				三	五	八	三	六
大正七十三年				三	五	八	三	六
大正七十四年				三	五	八	三	六
大正七十五年				三	五	八	三	六
大正七十六年				三	五	八	三	六
大正七十七年				三	五	八	三	六
大正七十八年				三	五	八	三	六
大正七十九年				三	五	八	三	六
大正八十年				三	五	八	三	六
大正八十一年				三	五	八	三	六
大正八十二年				三	五	八	三	六
大正八十三年				三	五	八	三	六
大正八十四年				三	五	八	三	六
大正八十五年				三	五	八	三	六
大正八十六年				三	五	八	三	六
大正八十七年				三	五	八	三	六
大正八十八年				三	五	八	三	六
大正八十九年				三	五	八	三	六
大正九十年				三	五	八	三	六
大正九十一年				三	五	八	三	六
大正九十二年				三	五	八	三	六
大正九十三年				三	五	八	三	六
大正九十四年				三	五	八	三	六
大正九十五年				三	五	八	三	六
大正九十六年				三	五	八	三	六
大正九十七年				三	五	八	三	六
大正九十八年				三	五	八	三	六
大正九十九年				三	五	八	三	六
大正一百年				三	五	八	三	六

昭 和 五 年 度	昭 和 六 年 度	昭 和 七 年 度	昭 和 八 年 度	昭 和 九 年 度	昭 和 十 年 度	昭 和 十 一 年 度	昭 和 十 二 年 度	總計	
								女	男
五三三	五二二	二二一	八一	二六	三九	一五六	一〇七	九五五	一三〇
四四	—	—	—	—	—	—	—	一七三	二七
—	—	—	—	—	—	—	—	二〇九	四三
—	—	—	—	—	—	—	—	一七六	五
—	—	—	—	—	—	—	—	二〇八	三三
—	—	—	—	—	—	—	—	四五	一一
—	—	—	—	—	—	—	—	一四	五
五三	五三	三一	八四	三四	三三	七五	〇三	六七三	一四八
九	八	三	三	五	七	三	三	一四三	二九三

右表の中棄兒とあるは歩行し得ざるものにして既に歩行し得るものは迷兒として其の收容方を照會せらるゝを常とす、歩行し得る者と雖も、相當の時日を経過して猶引取人出現せざれば棄兒と看做すべきも暫く收容當時の理由に依り表を作成せり、従て棄兒とあるは事實未歩行の乳兒なり、斯る未歩行の乳兒たる棄兒の數は非常に多く總數一、四三八名に對し一歳未滿の乳兒は六三六名の多きを數へ二歳未滿の者之に次ぐ。年齢長するに従ひ其の數を遞減すること左表の如し。

院兒收容當時年齡別表

昭 和 三 年 度 收 容 者	昭 和 二 年 度 收 容 者	昭 和 元 年 度 收 容 者	大 正 十 四 年 度 收 容 者	大 正 十 三 年 度 收 容 者	大 正 十 二 年 度 收 容 者	大 正 十 一 年 度 收 容 者	大 正 十 年 度 收 容 者	大 正 九 年 度 收 容 者	大 正 八 年 度 收 容 者	大 正 七 年 度 收 容 者	大 正 六 年 度 收 容 者	大 正 五 年 度 收 容 者	大 正 四 年 度 收 容 者	大 正 三 年 度 收 容 者	大 正 二 年 度 收 容 者	大 正 元 年 度 收 容 者	舊 濟 生 院 よ り 引 繼 者	年 度		
																		未 滿	一 年	
五	五	五	二	三	二	一	二	二	一	一	二	二	三	一	一	一	五	一	未 滿	一 年
三	九	八	五	二	八	四	四	五	二	二	一	一	一	一	一	一	二	二	未 滿	二 年
四	二	二	二	九	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	未 滿	三 年
一	一	三	五	五	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	未 滿	四 年
四	三	三	〇	七	一	一	一	二	三	二	一	一	一	一	一	一	一	一	未 滿	五 年
二	三	一	五	四	一	一	二	二	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	未 滿	六 年
一	四	二	二	三	二	一	一	二	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	未 滿	七 年
一	二	二	三	三	一	二	一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	未 滿	八 年
一	一	二	二	二	一	二	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	未 滿	九 年
一	二	一	一	一	三	三	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	未 滿	十 年
一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	未 滿	十 一 年
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	未 滿	十 二 年
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	未 滿	十 三 年
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	未 滿	十 四 年
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	未 滿	十 五 年
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	未 滿	十 六 年
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	未 滿	十 七 年
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	未 滿	十 八 年
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	未 滿	十 九 年
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	未 滿	二 十 年
八	八	七	七	五	三	三	三	四	九	一	五	五	四	五	三	二	六	六	計	

昭和三年度收容者	昭和二年度收容者	昭和元年度收容者	大正十四年度收容者	大正十三年度收容者	大正十二年度收容者	大正十一年度收容者	大正十年度收容者	大正九年度收容者	大正八年度收容者	大正七年度收容者	大正六年度收容者	大正五年度收容者	大正四年度收容者	大正三年度收容者
四	五	六	八	五	四	三	二	一	二	四	一	三	三	一
一	二	一	三	一	一	二	二	一	二	一	三	四	一	一
二	三	三	一	一	一	一	二	三	五	四	一	二	二	二
四	二	一	一	一	一	一	一	二	一	一	一	一	一	一
七	四	五	三	四	三	三	三	七	三	一	一	一	一	一
一九	九	九	五	五	五	四	一	四	九	七	三	七	二	二
一	二	一	一	一	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
八	七	八	七	五	三	三	二	四	八	一	五	五	四	五

一、院 外

第三章 事業狀況

(口) 保 育 教 養

昭和十三年三月末日現在	合計	昭和十二年度收容者	昭和十一年度收容者	昭和十年度收容者	昭和九年度收容者	昭和八年度收容者	昭和七年度收容者	昭和六年度收容者	昭和五年度收容者	昭和四年度收容者
一三五	二四三	六	三四	八六	四〇	三三	二	八五	六三	五六
二	三	一							三	
五	四五		五	一	一					一
四	二八		一		一			一	二	一
六	二七		六			一	一			
	二八									
三	二五	四	三				二		三	二
一六	七九	二	三	三	四	四	四	二	六	四
五七	一九三	六		三	二	二	二	二	二	一五
三	一五		二	一	二			一	一	
一	九	一						二		
一〇	三三	三	三	五	二	三	二			
	二			一						
	二		一							
二九	一四八	三	三	六七	五	三	一	八〇	九	八一

院兒にして未だ幼少授乳の必要ある者は全部里預けと爲しつゝあり。朝鮮に於ては從來幼兒里預けの習慣なかりし爲め當初是等乳兒の保育を託するに足る里親の希望者なかりしを以て止むを得ず院内に於て牛乳哺育を爲したるも豫想の如く良好なる成績を見る能はざりき、其の後種々なる方法を講じ里親の募集に努めたる結果漸次其の希望者を得るに至れり、而して里子は成長後と雖も、委託家庭狀況並に兒童の性能、發育狀態等を斟酌して委託を繼續し學齡に達すれば委託先の家庭より公私立普通學校其他の學校へ通學せしむの方法を採りつゝあり、現在里預けの數左の如し。

里 預 け 兒 童 數

昭和十一年度より越

二〇四

本年度新に里預けせる者

一八

死亡其の他に依る解約

二一

昭和十三年三月末日現在員

二〇一

里預けの料金は被服は里親の自辨とし一箇月京城府内は八圓其の他の府は七圓府外は六圓の範圍内に於て支拂つゝあり。

里預けの期間は滿十二歳迄とす、而して人情は東西相同じく數年鞠養の結果里親と里子との間に親子の情愛を生じ里親より引取扶養を願出づる者、又其他の者より引取扶養を願出づるものあり、斯る者に對しては其家庭の狀況人物等を調査し其の願意を許容しつゝあり。而して十二歳以上に達すれば保育期間を終り養育料の給付を停止し彼等の性能に應じたる職業見習を爲さしめ、之等兒童は相當の年齡に達し獨立の見込立つに至りたる時は退院せしむ、里預中の成績は相當の效

果を擧げつゝあり。

二、院 内

養育部に收容せる者は里預兒童中公立其の他の普通學校に入學し能はざるもの、又は身心に異常ある、特別保護を要する兒童等にして其の年齢は滿八歳以上のものなり、是等の兒童は學習寮と實習寮とに區分收容し職員と保姆との養護訓練の下に置き保育教養しつゝあり。

寮舎は學習科の院兒寮舎と實習科の院兒寮舎とありて一つの小丘を隔て學習科寮舎は三棟に分れ各棟には職員官舎を併置し職員は朝夕院兒の監督を爲し各寮舎に保姆一名若くは二名宛を配置し常に慈母たるの心を以て院兒の炊事より其他萬端兒童の日常生活の世話を爲さしむ、保姆は院兒の寢食を共にし一家庭寮圍氣中に教養保護を行ひつゝあり。

實習科院兒の寮舎は耕地に面し四棟の家族舎に分れ院兒は其の年齢及性質を斟酌して分宿せしむ、各家族舎には家父として職員を配置し其の家族と共に同一棟内に起居せしめ、院兒の監督及農業の實際的指導に當らしめつゝあり、特に學習科院兒の寮舎は昭和九年新築せられたるものにして通風、採光極めて良好且つ設備完全にして到る處に明朗の氣溢る、又實習科の院兒寮舎も昭和十年改築を加へ面目を一新せり。

院兒の賄方は學習科の院兒は各寮舎に於て保姆之を爲し、實習科の院兒にありては各寮舎の中央に共同炊事場と食堂等を設備し各寮舎交代に炊事當番を定め自炊せしむ、而して食糧品中糶米、雜穀、野菜等は自作自給の方法を採り院兒の被服及食物は奢侈の風を防止せんが爲多く朝鮮在來の風習に依り之を給與し主食物は米と粟との混合食にして

(實習科は一日
二人前白米四

第三章 事業 狀況

合粟二合學習科は一日 副食物は獻立豫定表を作りて大體之に依らしむ昭和十二年六月中に於ける獻立表は左の如し。

昭和十二年六月中院兒賄獻立表

(但喫食者一人當)

日	學科		習科		夕科		實科		習科		夕科	
	名稱	數量	名稱	數量	名稱	數量	名稱	數量	名稱	數量	名稱	數量
廿九日	汁味噌	五匁	煮付	五匁	油揚	一匁	汁味噌	六匁	煮付	六匁	燒	四匁
廿八日	汁味噌	八匁	其儘	八匁	汁	二匁	汁味噌	一匁	煮付	一匁	汁	六匁
廿七日	汁味噌	五匁	煮付	五匁	燒	三匁	汁味噌	六匁	其儘	六匁	汁	六匁
廿六日	汁味噌	五匁	煮付	五匁	汁	一匁	汁味噌	六匁	煮付	六匁	汁	六匁
二十日	汁味噌	五匁	其儘	五匁	汁	二匁	汁味噌	六匁	煮付	六匁	汁	六匁
十九日	汁味噌	八匁	煮付	八匁	汁	五匁	汁味噌	一匁	其儘	一匁	汁	六匁
十八日	汁味噌	五匁	煮付	五匁	汁	二匁	汁味噌	六匁	煮付	六匁	汁	六匁
十七日	汁味噌	五匁	煮付	五匁	汁	二匁	汁味噌	六匁	煮付	六匁	汁	六匁
十六日	汁味噌	五匁	煮付	五匁	汁	二匁	汁味噌	六匁	煮付	六匁	汁	六匁

十五日	廿五日	廿九日	十月四日	十月十三日	十月廿七日	十一月六日	十一月十五日
汁味噌	汁味噌	汁味噌	汁味噌	汁味噌	汁味噌	汁味噌	汁味噌
白菜	若芽	莢豆	白菜	莢豆	白菜	干切	莢豆
五〇匁	五〇匁	五〇匁	五〇匁	五〇匁	五〇匁	八匁	五〇匁
煮付	煮付	共儘	煮付	共儘	煮付	煮付	煮付
油干切	布豆白昆大	漬白根	太干豆腐	布豆莢豆	布豆莢豆	油干切	油干切
一八匁	五匁	五匁	一四匁	五匁	五匁	一八匁	一八匁
汁	汁	汁	汁	汁	汁	汁	汁
大根	白菜	干切	油揚	豆粉	豆粉	大根	干切
五〇匁	五〇匁	五〇匁	一四匁	五匁	五匁	五〇匁	五〇匁
汁味噌	汁味噌	汁味噌	汁味噌	汁味噌	汁味噌	汁味噌	汁味噌
大根	白菜	大根	若芽	干切	干切	若芽	若芽
六〇匁	六〇匁	六〇匁	六匁	一〇匁	一〇匁	六匁	六匁
煮付	共儘	煮付	煮付	共儘	共儘	煮付	煮付
莢豆	漬白根	布豆莢豆	布豆莢豆	布豆莢豆	布豆莢豆	布豆莢豆	布豆莢豆
六〇匁	六匁	六匁	六匁	六匁	六匁	六〇匁	六〇匁
汁	汁	汁	汁	汁	汁	汁	汁
大根	白菜	油揚	干切	干切	干切	干切	干切
六〇匁	六〇匁	一三匁	六〇匁	六〇匁	六〇匁	六〇匁	六〇匁

備考 白菜、菠薐草、大根、馬鈴薯、莢豌豆、朝鮮漬ノ材料ハ全部消毒生産品ヲ以テ充ツ。

院兒の衛生に關しては斯種兒童の體質健康は一般に比し稍々劣るを免れず、特に新に收容する兒童の多數は最も不良の狀態にあるを常とするを以て深く此の點に留意し家庭委託と爲す前に健康診斷を行ひ、又委託後は京城及其近郊に於ける兒童に對しては毎月一回、養育料給付前に、衛生事務を委嘱せる日本赤十字社朝鮮本部病院に出頭せしめ健康診斷を受けしむることとし、以て院兒の保健に深甚の注意を拂ひつゝあるを以て乳幼兒の死亡率は漸次遞減するの傾向なり。

各年度死亡兒年齢別表

大正元年	年度	六ヶ月未滿	一年未滿	二年未滿	三年未滿	四年未滿	五年未滿	六年未滿	七年未滿	七年以上	計
	年齢	一	一	一	一	一	一	一	一	三	六

病系神					病染傳					病器吸呼										
合	兒腫	腦	腦	神腦	合	癩	百敗	痘	流	水	ダ	赤	合	肺	結	肋	氣	肺	呼	
計	癩性	水	出	經膜	計	疹	咳	症	行	痘	フ	痢	計	壞	核	膜	管	カ	急	
	癩	腫	血	炎		疹	咳	症	性	痘	テ	痢		疽	性	炎	支	タ	性	
	癩	腫	血	炎		疹	咳	症	感	痘	リ	痢		疽	性	炎	支	ル	性	
	癩	腫	血	炎		疹	咳	症	胃	痘	ヤ	痢		疽	性	炎	支	性	性	
														三	六					
一				一										三				二		
一	一				一	一								五	二		二			
二	一				一									八	一		五			
一				一										五	二		二			
五		一		四	一							一		一〇	四		二			
一				一	二					一		一		六	五					
二				二	六	二		二	二					二	一					
四				二	六	一		二	一			一		四			二			
二					二	一						一		七		一	一	二		
					一					一										
					二	一								三			二			
一		一												五			三	一	一	
					四	二				一		一		一				一		
三		一	一	一	二	一						一		四		一	一	一		
一				一	三	一		一				一		七				三	一	
一				一	九	六			三					六			一		四	
二	一			一	三	一						一		五			二			
二				二										一	一			三		
一				一	三	二		一						九			二			
一				一	二	三								一〇			二	一	七	
二				一										五		一			二	
					一			一						二						一
														七		一				二
二	一			一	四		一		一	二				六		二		一		二
														三		一		一		一
三	四	二	二	三	五	二	四	三	四	八	二	五	五	一	三	一	三	三	八	三

第三章 事業狀況

二四

總計	列記									
	外 合 計	急 性 膿 胸	破 傷 風 症	丹 毒	壞 血 症	脚 氣	內 急 性 膜 性 炎	上 淋 巴 腺 炎	微 毒	營 養 不 良
六	一					一				
一〇	一									一
一三	三							一	一	一
二〇	一							一		
二二										
二五										
一六	一									
二六	一									一
三三	三								一	二
二六	五						二		一	二
一四	一					一				
一六										
二九	一						一			
三三										
四二	三								一	一
三三	一									一
三七	三					一			一	
二九	二					一				
三五	五	一						一	二	一
三三	三	一								一
三〇	三	一								一
一〇	一						一			
六一										
一七	二									一
一六										
二二	四	一							三	一
五六	四	二	二	一	一	三	五	二	一〇	一三

院內兒童は主として身心の異常あるものを收容するが故に最も兒童保健上に意を用ゆるは勿論、初めて收容を爲す者の如きは、假に隔離室に入れ異常なきに至りて混同收容するを例とし又在來の院兒の健康についても時々囑託醫員の來診を乞ひ健康診断を行ひ以てその健康増進を圖りつゝあり、又常時看護婦一名を置き院內收容兒の衛生方面に専ら從事せしめ輕病者は部内設備の衛生室に於て加療せしむるも、重病者は之を前述の病院に入院加療せしむることゝせり。

而して前述せる如く斯種兒童は救養前に於て食物の缺乏或は環境の不良其他の原因に依り身體的缺陷を有するもの屢々ありて、之等は單に健康を妨げるのみならず延ては陰鬱忿怒、不正直、浮浪性、其他幾多の性癖を醸すことゝなるを以て

之等の弊を除去せむが爲に、上叙の衛生的方面を考慮すると共に兒童の娯樂についても意を用ひたり。

兒童の娯樂及行事、養育部内收容兒は成る可く普通の農家庭の狀態に接近せしむると共に家庭的社會的の情操を兒童に植付くるの必要あるを認め、兒童の娯樂の一つとして朝鮮在來の胡笛、長鼓、鼓、小鼓等を備付け又は農民間の情緒的な年中行事を取捨選擇して出來得る限り之を取入るゝことに努め居れり、一面田園趣味の養成として自由花園の栽培を爲さしめ或は蓄音機、ラヂオ、角力場等の設備をなし常に心情を明朗に導きつゝあり。

院外委託兒童に對しては毎年兒童愛護週間期に於て里子と里親の慰安會を催し専ら慰安を興へ里親をして善良なる保育をなさしめんと之が獎勵をなしつゝあり。

(ハ) 教 育

委託家庭に於ける院兒の教育は彼上の通り其の家庭より公私立小學校に通學せしめ、院兒中盲啞者に對しては當院盲啞部に入れ之に盲啞教育を授け尙兒童の才能秀で成績優良なる者に對しては其の性質、健康、希望等を斟酌して便宜の方法に依り中等以上の教育を授くることを得る途を開けり。

院内收容兒童の教育、院内收容兒童は普通兒童に比し身心共に發育劣れるを以て、特に此の點に留意し滿八歳より院内に特設せる教室に於て兒童の實際に則したる四學年制度の特殊教育を行ひ情操の陶冶と勤勞精神との訓練に重點を置き彼等をして將來堅實なる國民たらしめむことを期す、本年三月末日に於ける就學兒童數は左の如し。

院 兒 就 學 狀 況

區 別	第一學年		第二學年		第三學年		第四學年		第五學年		第六學年		計	
	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男		
公 立 普 通 學 校	二	五	一	四	一	八	一	五	一	四	一	二	五	八
盲 啞 部	一	一											一	一
部 內 學 習 科	一	三	一	三	一	六	一	四					一	五
合 計	四	九	三	七	二	一	一	五	一	四	一	二	六	九
女	二	六	一	四	一	八	一	五	一	四	一	二	五	八
男	二	三	二	三	一	三	一	一					一	一

院內普通科の教科目及教授時間は必ずしも普通學校規程に準據せず、院兒の教養上實際に適切なる方法に依り教授することとし左表の通りなり。

教科課程及毎週教授時數表

修 身	教 科 目	第一學年		第二學年		第三學年		第四學年	
		時數	課 程	時數	課 程	時數	課 程	時數	課 程
	三 國民道徳の要旨								
	三 同								
	三 同								
	三 同								

(二) 實習科院兒の指導訓練

實習科の院兒は現在四十三名にして之等院兒は將來堅實なる國民たらしむるを目的とし之が爲め先づ毎朝神社參拜前訓話により院兒の敬神感を培ひ一方作業に依りて彼等の心身を鍛練し堅忍勞働に堪へ素朴の生活に甘んじ自營自活の風に習熟せしむることを期せり。

院兒の起居に關しては最も節制規律を重んじ敬虔の念清潔の風習を養ひ憂鬱と性癖を轉じて快活の氣風を喚起し院内に於ける共同生活中自ら同情の念を醸成せしむることに力めつゝあり。

斯くの如くにして在院數年其の間精神を陶冶し身體を鍛練し將來よく自活し得る國民たるの資格を得せしむると共に作業獎勵の爲め且つ自活の資金たらしむるが爲めに従業給與金の支給を爲しつゝあり。

猶農家經濟の實際を知らしむるが爲め小作練習の方法を設けて院兒に土地を分擔耕作せしめ收支を經理せしむることゝし最も年長なる院兒につき之を實施し成績を見て退院せしめ地方篤志家の小作人となし或は自營の農民と爲し又兒童の性格を參酌して商工業方面にも進出せしむることゝせり。

院兒の作業は普通農家の經營する業務の全部に亘らしむるの方針なるを以て畚田の耕作、山林の植樹、砂防より家畜の飼養、堆肥の製造等は勿論家屋の小修繕より日用諸品の補足修理一般の雜務に至るまで皆院兒をして自ら之に當らしむる事とす。

今昭和十二年度中に於ける院兒作業に依り生じたる生産品の數量及價格を調査し前年度の成績に對照すべし。

員表	一人當耕作段別	從業員數	其他	計
三人	四人	八五七二三	七、八四二	九五、六六七
三九	四〇人	八五七二三	七、八四二	九五、六六七
三九	四〇人	八五七二三	七、八四二	九五、六六七
三九	四〇人	八五七二三	七、八四二	九五、六六七
三九	四〇人	八五七二三	七、八四二	九五、六六七
三九	四〇人	八五七二三	七、八四二	九五、六六七
三九	四〇人	八五七二三	七、八四二	九五、六六七
三九	四〇人	八五七二三	七、八四二	九五、六六七
三九	四〇人	八五七二三	七、八四二	九五、六六七
三九	四〇人	八五七二三	七、八四二	九五、六六七

從來給與金は作業の難易及實績、從業時期及時間、勤務の狀況及品行等を參酌し院兒の作業により生産したる物品の賣上代價額の範圍内に於て農場に於ける農業従事の院兒に之を分配するものにして大正三年度以降之を實施せり。

本年給與せる金額は最低一名八圓最高一名二十五圓にして平均一人十七圓五錢に當り其の給與總額六百十四圓なり。

各年度別給與金分配表

年度別	生産品賣上價格	從業院兒數	一人平均割當	最高支給額	最低支給額	實際給與總額
大正三年度	一〇三、二六〇	九八	一、四七〇	一、九七〇	一〇六、二〇〇	一〇三、二六〇
大正四年度	五〇七、〇七〇	三三	一五、八四〇	三三、〇七〇	三、二五〇	五〇七、〇七〇
大正五年度	七八五、六〇〇	三九	一六、三〇六	三三、〇四〇	一、三〇〇	六三七、五一〇
大正六年度	五九九、七三〇	三三	一五、六一一	二九、〇八〇	一、五九〇	四八三、九五〇
大正七年度	一、四六五、五三〇	二八	一七、八五〇	三三、二八〇	一、〇六〇	五〇〇、〇〇〇
大正八年度	二、四九五、一〇〇	二七	二九、六三〇	六九、四〇〇	五、四〇〇	八〇〇、〇〇〇
大正九年度	一、〇七三、四八〇	二六	二六、六二〇	七、九〇〇	二、一〇〇	七〇〇、〇〇〇

第三章 事業狀況

大正十年度	一、〇二七、〇〇〇	二二	三、四六七、〇〇〇	五五八、〇〇〇	・五〇〇	七九七、五〇〇
大正十一年度	九七三、四七〇	二二	四、六五〇、〇〇〇	五五七、〇〇〇	三、五三〇、〇〇〇	八七六、六〇〇
大正十二年度	一、六四三、八〇〇	一七	六、一三二、〇〇〇	八〇、四〇〇	四、五九〇、〇〇〇	一、〇四三、三〇〇
大正十三年度	二、三〇一、六七〇	三二	九、七七〇、〇〇〇	三三三、〇〇〇	四、三二〇、〇〇〇	二、〇五二、八〇〇
大正十四年度	三、四三二、七七〇	一九	七、〇二六、〇〇〇	一、五一〇、〇〇〇	三、四〇〇、〇〇〇	一、三三三、〇〇〇
昭和元年度	二、六四四、〇三〇	二五	四、七七五、〇〇〇	九八、〇〇〇	二、九〇〇、〇〇〇	一、一九四、〇〇〇
昭和二年度	三、六六九、八四〇	一九	四、五四二、〇〇〇	六四〇、〇〇〇	一、六〇〇、〇〇〇	八六三、〇〇〇
昭和三年度	二、六四九、〇九〇	一七	五、一三三、〇〇〇	七九〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	八七一、〇〇〇
昭和四年度	三、二〇五、八四〇	一八	四、七四〇、〇〇〇	一〇三、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	八五四、〇〇〇
昭和五年度	二、七四八、七三〇	二〇	四、六〇〇、〇〇〇	一、一五〇、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇	九三〇、〇〇〇
昭和六年度	二、九三三、三三六	一七	五、三三三、三三三	九五〇、〇〇〇	三、二〇〇、〇〇〇	九〇七、〇〇〇
昭和七年度	三、六四一、八九〇	一五	六、〇七三、三三三	八三〇、〇〇〇	三、九〇〇、〇〇〇	九一、〇〇〇
昭和八年度	三、四八六、八〇〇	一六	五、六三七、三五	八〇〇、〇〇〇	一、八〇〇、〇〇〇	九〇三、〇〇〇
昭和九年度	三、八四一、九七三	一七	二、六五三、〇〇	五五〇、〇〇〇	九〇〇、〇〇〇	四、五二〇、〇〇〇
昭和十年度	二、五九四、九二三	二八	三、六四二、八	三六〇、〇〇〇	三、二〇〇、〇〇〇	七四〇、〇〇〇
昭和十一年度	三、二〇一、八九七	三七	一、八一九、〇〇	二、五〇〇、〇〇〇	一、四〇〇、〇〇〇	六、五五〇、〇〇〇
昭和十二年度	二、六四三、四六五	三六	一、七〇五、〇〇	二、五〇〇、〇〇〇	八〇〇、〇〇〇	六、一四〇、〇〇〇

(ホ) 退 院

大正元年以降の退院者五百名中扶養者引取三百七十六名自活退院者百二十四名にして逃走五十六名死亡五百六十九名其
 の他二十名あり合計減員千百四十五名にして即ち左の如し。

大正元年度以降減員理由表

年 度 別	退		逃	走	死	亡	其 他	計
	及 扶 養 子 者 引 遣 取	自 活 退 院						
大正元年年度	一六	一四	一	〇	〇	〇	〇	三〇
大正二年年度	四〇	一	〇	三	〇	〇	〇	四三
大正三年年度	六四	〇	〇	二	〇	〇	〇	六六
大正四年年度	二六	〇	〇	四	〇	〇	〇	三〇
大正五年年度	一八	一	〇	一	〇	〇	〇	二〇
大正六年年度	一六	二	〇	一	〇	〇	〇	一九
大正七年年度	一六	四	〇	三	〇	〇	〇	二三
大正八年年度	二九	三	〇	六	〇	〇	〇	三五
大正九年年度	一六	三	〇	三	〇	〇	〇	二二
大正十年年度	一六	三	〇	一	〇	〇	〇	一九
大正十一年年度	八	四	〇	〇	〇	〇	〇	一二
大正十二年年度	八	一	〇	一	〇	〇	〇	一〇
大正十三年年度	七	一	〇	〇	〇	〇	〇	八
大正十四年度	七	二	〇	〇	〇	〇	〇	九
昭和元年年度	三三	五	〇	四	〇	〇	〇	四二
昭和二年年度	二七	八	〇	三	〇	〇	〇	三五
昭和三年年度	一八	一	〇	二	〇	〇	〇	二一
昭和四年年度	二六	五	〇	一	〇	〇	〇	三一
昭和五年年度	三〇	四	〇	〇	〇	〇	〇	三四

第三章 事業狀況

昭 和 十 二 年 度	昭 和 十 一 年 度	昭 和 十 年 度	昭 和 九 年 度	昭 和 八 年 度	昭 和 七 年 度	昭 和 六 年 度
計						
三七六	二七	二五	五五	七	一三	三三
二三四	一四	五	一八	一	一三	
五六	一	三	一			三
五九	一三	一六	一七	八	八	三三
二〇					一三	五
一一四五	二〇	六四	二八	三三	二九	四七

退院兒五百名に付最近調査したる所に依れば多くは夫々相當の職業に従事し糊口の途を立て居れり職業別左の如し。

退院兒職業調 (昭和十三年三月三十一日現在)

職 業 名	退 院 者		死 亡	現 存 者
	既 婚 者	未 婚 者		
農 業 男	七	五四	三	五九
農 業 女	一			一
商 業 男	六	五		二
商 業 女				
木 工 男				
木 工 女				
石 工 男		三		三
靴 工 女				
計	一三	五九	三	一一五

第三章 事業狀況

病院 助手	印刷 工	理髮 工	店員	料理 人	自動車 運轉手	事務 員	按摩	諸備 人	洗濯 業	電氣 工	車類 修理 工	鋸力 工	洋服 工
女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男

| 一 | | | | 一 | | | | 一 一四 一二 | 八 | 一 | 四 | 一 | | | 三

| | | 一 | 一 | 八 | 一 | | | | 一五 | 一六 | 一 | | | | 一 | 五

| 二 | 一 | 一 | 九 | 一 | 一 一四 二七 | 二四 | 二 | 四 | 一 | 一 | 八

三五

| | | | | | | | | | | 一 | | | | | | | 一

| 一 | 一 | 一 | 九 | 一 | 一 一四 二七 | 三三 | 三 | 四 | 一 | 一 | 七

總計	不詳		無職養子差遣		無職扶養引取		其他		雜役	
	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男
五二四	二	九	一	一	一	一	一	一	一	一
四一九〇	三	五九	一	四八	五	七四	二	一	一	一
五〇〇	三	〇八	一	四五	五	七四	二	一	一	一
七一九	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
四九三	一	三	一	四	一	三	一	一	一	一

三 盲啞部狀況

(イ) 入學

盲啞教育事業は從來一般に等閑に附せられたり然れども第一回即ち大正二年三月生徒募集以來毎年相當の志願者を數へ殊に自費志願者並女子の入學希望者の如きも亦漸次増加するの傾向を示せり。

各年度別入學出願者調表

年 別	給費出願		自費出願		合 計	
	男	女	男	女	男	女
大正二年	三	三	六	二	三六	五
計	四三	四三	四三	四三	四三	四三

第三章 事業狀況

昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大
和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正
十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	十	十	十	十	十	十	九	八	七	六	五
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年

七 八 四 七 四 四 四 四 四 四 六 六 六 六 五 三 三 三 二 六 三 七 八 三 五

九 二 二 三 九 四 七 五 八 二 〇 三 三 三 四 一 三 四 四 三 三

九 八 三 二 三 三 三 九 八 三 三 二 三 四 三 六 七 〇 三 〇 三 五

七 五 二 五 五 五 四 七 五 五 六 六 五 一 七 三 三 一 三 三 一

八 五 六 五 五 五 五 五 六 八 七 七 七 二 二 五 七 三 三 九 八 六 四

三七

一 六 六 三 一 七 四 九 一 三 三 六 六 八 八 三 二 四 六 五 六 五 五 四

一〇三 七〇 七三 七三 六八 六八 六三 六三 八一 九六 九五 九三 八六 八六 三二 三九 七五 五三 三二 元

昭 和 十 三 年	昭 和 十 二 年	昭 和 十 一 年
一〇八七	八六六	七〇〇
一七七	二二二	一四一
二九〇	二二二	二〇〇
二一九	二一九	二〇〇
二一九	二一九	二〇〇
一三七七	一〇七	九〇
二九六	三〇〇	三三三
一六七三	一三七	一一一

第一學年入學許可狀況表 (△印は速成科とす)

大 正 十 三 年	大 正 十 二 年	大 正 十 一 年	大 正 十 年	大 正 九 年	大 正 八 年	大 正 七 年	大 正 六 年	大 正 五 年	大 正 四 年	大 正 三 年	大 正 二 年	年 別		
												男	女	
八	二	三	二	五	二	五	八	三	三	三	七	二	△	△
	二		四	一	三	三	一	四	一	三		二		
八	三	三	二	九	三	八	二	四	六	三	六	七	九	一
二	九	〇	九	六	五	九	四	三	四	三	九			
八	三	二	五	三	三		三	二	四	一	三			
二〇	二	三	二	四	九	八	九	一	七	五	八	四	二	三
二〇	二〇	三	四	一	七	二〇	二七	二七	二五	一六	一六	七	△	△
二〇	二〇	三	四	一	七	二〇	二七	二七	二五	一六	一六	七	△	△
八	五	二	九	四	六	三	四	六	五	四	五			
八	五	二	九	四	六	三	四	六	五	四	五		△	△
二八	二五	二四	二五	二二	二六	三〇	三三	三二	三二	二二	二〇	七	三	二

第三章 事業狀況

計	育本 修業三年			學 年 別
	第一學年	第二學年	第三學年	
四				男
				女
四				計人
				男
四				女
				計人
四				男
				女
四				計人
				男
四				女
				計人

育嚙部生徒學年別 (昭和十三年三月末現在)

計	昭 和 十 三 年	昭 和 十 二 年	昭 和 十 一 年	昭 和 十 年	昭 和 九 年	昭 和 八 年	昭 和 七 年	昭 和 六 年	昭 和 五 年	昭 和 四 年	昭 和 三 年	昭 和 二 年	昭 和 一 年	大 正 十 五 年	大 正 十 四 年
三七四	二四	三三	三三	三三	三三	三七	〇三	三三	三九	二二	三三	三三	三三	三三	三九
三四							三一	三三	三一						
四〇八	二四	三三	三三	三三	三七	三三	三三	三五	二一	三三	三三	二二	三〇		
二九三	二六	三五	三六	二二	三九	二二	二二	二〇	九〇	〇〇	〇八				
一二三	七	八	七	六	八	四	五	五	三	四	五	六	二	六	
四〇五	三三	三三	三三	三七	〇三	三三	三六	三六	四四	四四	四四	四六	二四		
六〇六	五〇	四九	二四	二九	二九	三三	二四	三〇	三三	三三	三三	三三	三七		
一四七	七	八	七	六	八	六	六	七	五	五	六	六	二	七	
八二三	五七	五六	三〇	三七	三五	二九	三三	三五	二六	二七	二七	二四	二四		

合 計	聾 本 科 修業五年				
	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
計	一〇六	一一二	一一二	一一一	一〇六
計	五五	一一	一一	一一	五五
計	一五	二二	二一	三一	一四
計	一〇八	六四	一〇九	九九	一二
計	二二	二二	三三	二五	六五
計	二九	八五	二二	二四	二九
計	二八	七〇	二二	二二	二六
計	二六	二六	四二	二六	七七
計	一四四	九六	一五	二七	三三

生徒年 齡 表 (昭和十三年三月末現在)

科 別	第一學年					第二學年			第三學年			第四學年			第五學年			
	最低	最高	平均	最低	最高	平均	最低	最高	平均	最低	最高	平均	最低	最高	平均	最低	最高	平均
盲	二二〇	一九五	二一七	一三七	二〇九	一七六	一五七	二二〇	一八七	一一四	一八九	一五三	一一三	一八八	一五二	一一〇	一七九	一五〇
聾	七九	一五八	二一八	九九	一六五	一三四	一一〇	一七〇	一四〇	一一四	一八九	一五三	一一三	一八八	一五二	一一〇	一七九	一五〇

修業年限は聾生科五箇年、盲生科三箇年とす。

入學年齢は聾生科十年以上、盲生科十二年以上とす。

盲聾生徒給費及自費區分表 (昭和十三年三月末現在)

盲 生 給 費	區 分		計 人	朝 鮮		計 人	合 計	
	男	女		男	女		男	女
一	一	一	二	一	一	二	一	一
二	一	一	二	一	一	二	一	一
三	一	一	二	一	一	二	一	一
六	一	一	二	一	一	二	一	一
九	一	一	二	一	一	二	一	一
三九	一	一	二	一	一	二	一	一
三九	一	一	二	一	一	二	一	一
三九	一	一	二	一	一	二	一	一
三九	一	一	二	一	一	二	一	一

合	計		計		計
	自給	計	自給	計	
一〇	九	一	六	六	一四
五	五	一	五	五	一
一五	一四	一	二	二	四
一〇八	六三	四六	六四	五六	四四
三	一八	三	三	一八	三
一三九	八〇	四九	八五	七四	二四
一八	七二	四七	七〇	六三	八
三六	三三	三	二六	二二	一
一四四	九四	五〇	九六	八五	二
					四八

生徒の入學に對しては別に學力の試験を施さざるも本人心身の狀態及び素行其他保護者の職業並に生活狀態等に就ては充分の調査を爲し入學許可の參考とす、然れども入學後、不健康の狀態を發見し又は其の成績劣等にして修學の見込なき者は止むを得ず退學せしむる事あり、入學者の年齢は一定の制限以上の者を採用するを以て長幼不同なるを免れず。

生徒は主に京城府及京畿道を中心とする者多く之に次ぐを平安南道忠清南道及咸鏡南道とす本院の施設は初め主として恩賜金に依り之を經營せし事業なりしを以て成るべく廣く各道に亘り其の惠澤の普及せられんことに努めたり、生徒の出身道別は左表の如し。

生徒出身別表 (昭和十三年三月一日現在)

道名	内地人		朝鮮人		合計	
	男	女	男	女	男	女
京畿道	八	四	三八	一九	四六	一三
忠清北道			四	一	四	一
合計	八	四	四二	二〇	六二	一四

忠清南道	全羅北道	全羅南道	慶尙北道	慶尙南道	黃海道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道	計
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	一〇
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	五
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	一五
3	4	3	8	5	5	9	3	6	1	1	一〇八
1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	三
4	4	5	0	7	5	1	3	8	1	1	一三九
4	4	3	8	5	5	9	3	6	2	2	一一八
1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	三六
五	四	五	一	七	五	一	二	三	九	二	一四四

(ロ) 教 育

前示せるが如く盲啞生共入學の際別に成績の考査を爲さず且其の收容年齢にも差等あるを以て學業の成績又一様ならず優劣區々たるを免れずと雖其の進歩の度合は比較的良好なるものゝ如し。

盲生は生徒の年齢高きを以て理解力割合に良好なり盲生科の修業年限は三箇年にして殊に國語と實科とに對しては特に力を注ぎ居れるを以て第一學年第二學期よりは簡單なる會話を爲し國語力の進歩著しきを認め實科としては鍼灸灸及マツサージを課し第三學年に至れば授業時間外に於て實地練習を目的として一般者の需に應じ以て技術の練習と普通作法の實際とに慣れしむることに努めつつあり。

教授上の方針としては普通科たると實科たるとを問はず練習と應用とに重きを置き實物又は模型等を利用して確實な

る知識の取得に力め尙資料にありては特に應用方面より見たる假設的發問を爲し之に應じて施術を爲さしむる等實際的指導に重きを置けり。

育本科教課程及週教授時間數表

科目	第一學年	第二學年	第三學年	時間
修身	道德の要旨作法	同上	同上	一
國語	發音、點字、單語、短句、 近易なる普通文、讀方、 綴方、話方	近易なる普通文の讀方、 綴方、話方	同上	一二
朝鮮語	綴方、話方	同上	同上	一二
算術	整數	小數、諸等數	分數、比例、歩合算	四
唱歌	單音唱歌	同上	複音唱歌	一
體操	體操、遊戲	同上	同上	二
鍼按	普通按摩(全身)鍼術(鍼治法の大意用管刺法)解剖大意	普通按摩術(按腹)鍼術(用管刺法)灸術(灸治法)生理の大意	マッサージ(全身)鍼術(捻鍼刺法)灸術(灸治法)病理衛生大意鍼灸按摩(マッサージを含む)孔穴學の大要	一六 一六 一六
計		三六	三六	三六

公民教材の意味に於て國語科時間の一部を割き國語教授の下に地理理科を加へ地理にありては朝鮮に出發して内地に及び我が國の地位國勢其の他一般狀況等に付き教授し理科にありては通常の天然物及自然の現象に關する智識の一斑其他人生に對する關係並に生活上必要なる事項等に就き教授する事にせり。

其他觸覺練習情操教育及身體の養護鍛鍊等には特に注意し相當なる設備をなせり。

曩年盲生には別に速成科を設け一年の短期を以て修業せしめたるも技術の練習充分ならざりしを以て目下之を中止せり。 嗶生は修業年限五箇年なり、而して生徒年齢は盲に比して低く且つ能力に缺陷有るが故に學科實科共に其の進歩遅々たるを免れざるも教育熱の向上に伴ひ家庭の注意を惹起し成績漸次良好に進みつゝある傾向を示せり裁縫科に於ける技術の成績は比較的良好なり。

嗶本科課程及毎週教授時間數表

科目	第一學年	時間	第二學年	時間	第三學年	時間	第四學年	時間	第五學年	時間
修身	道德の要旨	一	同上	一	同上	一	同上	一	同上	一
國語	發音、假名、日常須知の文字	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二
朝語	通文、讀方、筆談書方	一	同上	一	同上	一	同上	一	同上	一
算術	整數、遊戯數	五	同上	五	整數、小數	四	諸等數、分數	四	比例、歩合算	四
體操	體操、遊戯	二	同上	二	同上	二	同上	二	同上	二
手藝	裁縫、圖畫、簡易なる形體、(洋服) 運針法、手藝	三	(和服) 簡易なる衣類、(洋服) 縫方、同上、及手藝	一	(和服) 通常衣類、(洋服) 縫方、同上、及手藝	六	(和服) 縫方、及繕方、(洋服) 縫方、下着類、及通學服縫方	六	(和服) 縫方、(洋服) 縫方、及毛織、其他縫方	七

計	金工					
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
	の筒用簡 工作單具 なるなる 方法物品					
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
	同と藥機用 注意品械及 及品名工 修他及用 理修途使					
四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四
	實用簡法 習品單法 其工のなる 他作の日常 修修工作法					
五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇
	製用器 圖講及 工作					
五一	五一	五一	五一	五一	五一	五一
	同 上					

嚙生科に於ては盲生科と同じく國語科の下に地理理科を加ふる事にせり尙四、五學年には毎週一時間づゝ珠算をも課し重に加減算に付教授することとせり。

嚙生科一、二學年に手工を加へ重に紙細工、豆細工、粘土細工、厚紙細工等を課せり意匠、創作力の養成、緻密なる思想の涵養其他手指の練習等に有效なるのみならず情育方面に取りても確かに價値有るものと認めたり。

庶務規程を改正し嚙本科課程中に金工科を加へ昭和六年四月より實施せり生徒中より希望者を募り日用器具の製作を教授練習せしむるものとす。

盲嚙生の精神状態に稽へ情操教育の必要を感じ左の事項に對しては特に注意を拂ひ之が陶冶に努めたり。

盲生に對しては唱歌科を重視し且つ諸種の樂器類を備へ之に依りて溫雅なる情操の養成に力め同時に雨雪天體操時間をも利用し情的教材に依る談話を試み修身教材の如き斷片的教材を避け重に連續的情教材を採用し以て道德的行爲に衝動を與ゆると同時に情操の養成に努めつゝあり。尙寄宿舎にラヂオ機を備付け毎週二回之を聽取せしむる事として慰安方法の一つとせり。

嚙生に對しては圖書科を加へ特に寫生に重きを置けり一面には鑑賞材料を蒐めて一定の場所に掲げ不絶之を鑑賞せしむる事に力め尙校庭の美化に注意し或は生徒をして花卉の栽培を爲さしむる等不知不識の間に審美的觀念の育成を圖り平和

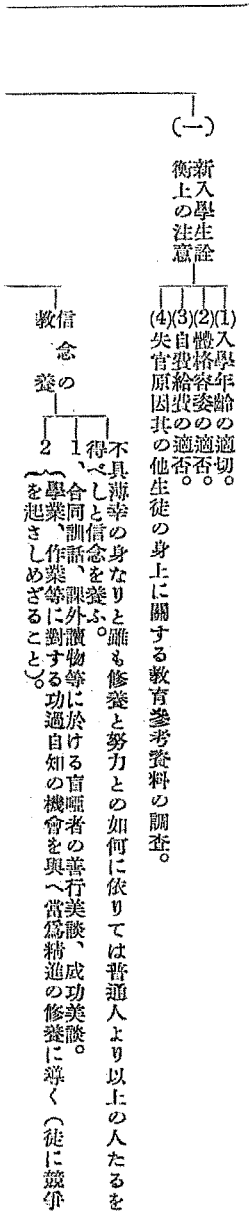
の生活に導くべく指導し且つ朝會の如きは確に師弟間の情誼を温め一面情教育に資する所大なるものあるを考へしむるに至れり。

生徒に對する教師の心得

- (一) 同情を以て蒞み懇切を以て導き可成彼等に得心を與ふる様指導する事。
 - (二) 當部の生徒は自己に境遇上比較的依頼心強し同情懇切を以て接すべしと雖も愛に溺れしめざる様注意する事。
 - (三) 當部生徒の狀況を見るに嚙生は一般に荒み易く盲生は僻見に傾く嫌あり柔にして能く剛を制し坦懐にして能く疑を解くと云ふ考を以て指導する事。
 - (四) 長上を敬し明輩に親み幼者を勞はる様導く事。
 - (五) 共同心の養成に努め人類相愛の徳を養ふ事。
 - (六) 學業に作業に全力を傾注するの習慣を養ひ且つ學校を愛し校舎具を大切にするの徳を養ふ事。
 - (七) 日常生活に必要な禮儀作法に慣れしむる事。
 - (八) 放漫に陥るを防ぎ着實なる思想の持主たらしむる事
- 其の他の訓育に關しても注意の周到ならむことを期し訓練要項及其の細目を規定し一要項毎に循環的に之が實行を強ひ以て其の徹底を圖りつゝあり。
- 盲嚙兒の如き特殊兒童の教養にありては左の二項を以て訓育上最も必要なる要件と見るを得べし故に此の點に對しては特に注意を拂ひつゝあり。
- (一) 職員は互に心を同ふして兒童の訓育に膺ること即ち統一せられたる訓育たるべきこと。
 - (二) 最上級生徒の訓育の徹底を期すること。
- 其他十二年度に於て特に行ひたる行事及努力事項等を列記すれば次の如し。

三	二	一	十	十	十	九	八	七	六	五	四
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
<p>記念植樹。各學級特別訓話。動物園見學。職員打合會。裁縫教材打合會。遠見會。 身體検査。職員打合會。家庭狀況調査。職員市内學校參觀 校外教授。教室訓話。校舎内外大掃除 各學級特別訓話。休暇中心得及復習材料調査。職員打合會。大掃除 京城在住の生徒召集 銭按マツサージ及點字講習會。職員打合會。郊外教授。校舎内外大掃除及整理 遠見會。職員打合會。 職員打合會 各學級特別訓話。職員打合會。服裝検査 生徒募集調査。裁縫實習程度調査。舎内大掃除 上級市内見學。職員打合會。服裝検査 上級市内見學。朝鮮神宮參拜。生徒慰安會。職員打合會。校舎内外大掃除</p>											

済生院規則第十七條乃至第二十二條の規定に依る常習啞部教育の目的及其の事業の達成を期せんが爲に行ふ諸種の施設事項中特に努力すべき事項次の如し。



覽要項事力努の上養教徒生部啞盲

第一生徒
上徒

(二) 教生
養上の

自律協同
訓練

1、頼他心の増長を識め常に自律的訓練に留意し進んでは愛他協同の諸徳を養ふ。
2、學用品の整備、身の清整等は自ら之を爲さしむ。
3、教室寄宿舎衣類の清整、花卉及蔬菜栽培。

普通學科
の實際化

當部の實際に適する教科書の編纂、盲啞教育の生命たる直觀教授の振興。
盲生 各科點字讀解力向上。常識教材、自治教材供與、直觀物の提示。
啞生 筆談力の向上(讀本編纂、教授法研究、成績考查、筆談手帳の活用)。
直觀教授の振興(既存繪畫及標本實物の活用)。

實科教育
の實際化

家庭の事情男女性別能力の適否を考慮し、科目の選擇をして適應の教育を施す。
盲生 鍼按科直觀教授の勵行。
啞生 課外實習の指導、女生の手藝獎勵。女生の和鮮裁教授。
洋裁組と板金組との區別上の注意。

體育運動
の作

1、體操正科教授の振興。
2、十分間體操勵行。
3、運動競技の指導獎勵。

職業指導

1、補習教育。
2、弟子入又は開業の指導斡旋。

(三) 卒業生指導

盲啞協會
振興

1、通信に依る相互修養。
2、社會奉仕。
3、癡學事業の實行。

(四) 父兄連絡

家庭訪問又は通信連絡。
受持分擔と父兄聯絡日誌。

情操陶冶

快活にして恬淡優雅端麗なる心情を養ふ。
1、唱歌體操の振興。
2、文學的讀物の供與。
3、尺八、琴、オルガンの課外教授。
4、蓄音器、ラヂオの利用。
盲生 禮儀作法の指導、圖書科の振興と成績品活用。
花莖栽培、小鳥の飼育、運動競技の指導。
啞生 教室寄宿舎の美化、聖化、運動競技の指導。
4、情操教育の資料の文庫開設。

第二職員
の勤務上

廣く協議を遂げて一旦決定したる事項は一事實行と和衷協力とを以て實績の擧揚に全力を盡すこと。
(一) 具案的活動の繼續(學級經營案、花園蔬菜園經營案、寄宿舎經營案)。
(二) 反省會下の活動(簡單なる成績考査勵行、分辦事項の土曜反省會)。
(三) 小事脚踏の實行(紙屑拾、小破修繕等)の小事、脚踏の實行を教みつゝ理想實現の域に進むこと)。
(四) 個別教育に徹すること(我が子なりせば心情を以て個別教育に徹すること)。

第三、設備
上、設

(一) 常年庶務費豫算及職員の力の容す限りに於て次の設備を實行すること。
(二) 直觀教學物の購入及蒐集製作。
(三) 差當り欠くべからざる直觀教學物の購入及職員の手による蒐集製作。
(四) 教科書編纂(職員の手による)。
(五) 昇降口の下屋、下駄箱、手洗、塵箱等の設備及校舎内側の整備。
(六) 職員の手による小破修繕(工具の準備)。
(七) 盜難防止の設備。

第四、寄宿舎
經營上

(一) 舎内外の聖化美化。
(二) 規律的生活及自學自習の指導。
(三) 十分間體操の勵行。
(四) 身體衣服の清潔及用具の整頓。
(五) 趣味娛樂の指導。
(六) 非當時に於ける集會解散の訓練。
(七) 賄の合理化、經濟化、衛生。
(八) 共同作業及作法教育。
(九) 相當年齢に達せる男女生に對する嚴肅なる教育。

第五、豫算
經理上

(一) 責任ある經理の實行。
(二) 經理事務の正確と簡捷とを期す。
(三) 次年度豫算原案の下調。

(ハ) 給費の狀況

給費生は總て寄宿舎に入らしめ舎監々督の下に起居せしむ、寄宿舎を構内に設備し男女に依り區分收容す。食事學用品等を官給するの外大正四年度より夏期休暇又卒業の際は本人の郷里と京城との間に於ける旅行の費用に大略相當する金額

を手當として支給することを得ることゝし貧窮者の入學に多くの便宜を興ふることゝせり。

然れ其是等給費生に對しては卒業後に於ける何等の制度又は義務を附することなく全然救恤の方針の下に之を收容せり。

昭和十年三月末現在の給費生は盲生二十七名聾生十三名にして計四十名なり。

給費生の食事は直營として供給せしむ而して其の食費は物價の高低に依り上下すと雖現在は一日一人の食費二十錢内外の割合なり。

(二) 卒業者状況

卒業者各年度別調 (△印は速成科とす)

年度	盲		聾		計	
	男	女	男	女	男	女
大正二年	△	△			△	△
三年	△				△	
四年						
五年						
六年						
七年						
八年						
九年						
同年度	七	六	三	一	一〇	六
同年度	六	六	三	一	九	七
同年度	六	六	五	一	一一	七
同年度	六	六			六	六
同年度	八	二			一〇	二
同年度	八				八	
同年度	六				六	
同年度	九				九	
計	七	六	三	一	一〇	六
計	六	六	五	一	一一	七
計	八	二			一〇	二
計	八				八	
計	六				六	
計	九				九	

大正二年 年度	年							
	別							
	男	盲						
	女	生						
	計	科						
	男	廳						
	女	生						
	計	科						
	男	合						
	女							
	計	計						

卒業者死亡數調

	同	同	同	同	同	同	同	同	同	昭	同	同	同	同	同	同
	和															
計	十 二 年 度	十 一 年 度	十 年 度	九 年 度	八 年 度	七 年 度	六 年 度	五 年 度	四 年 度	三 年 度	二 年 度	十 五 年 度	十 四 年 度	十 三 年 度	十 二 年 度	十 一 年 度
	二 〇 〇	一 三 九	一 三 九	一 六 七	一 七 二	一 八 二	一 八 二	一 八 二	一 七 二	一 七 八	一 八 九	一 七 九	一 七 二	一 七 六	一 五 五	
	三 一	一	一	一	三	一	一	一	一	一	一	一	一	二	一	
	三 三	一 三	一 三	一 九	一 七	一 八	一 四	一 八	一 八	一 八	一 八	〇 二	一 九	一 六	一 六	
	二 一	二 一	六 八	六 八	六 八	六 五	七 八	九 六	七 七	四 八	一					
	四 〇	四 四	三 四	二 四	二 四	三 二	二 三	二 三	五 一	一	一	一	二	一	一	
	一 五	一 五	九 三	八 三	八 三	八 九	一 一	一 四	七 八	七 七	四 〇	一				
	三 一	二 〇	一 九	一 七	二 三	一 五	一 七	三 八	一 六	〇 三	三 五	一 六	一 五	一 五	七 五	
	五 三	四 三	三 四	三 三	五 三	五 五	三 二	三 三	五 二	一 一	一	一	四	一	一	
	三 七	二 四	三 三	三 三	一 五	二 〇	三 三	一 六	二 〇	一 九	二 五	一 五	一 六	一 七	一 九	七 六

同	十二年度	一	一	一	一	一	一	一	二
計		一三	一〇	二三	一五	六	三二	二八	二六
									四〇

大正二年四月盲啞部開設以來盲の卒業生を出す事速成科二回本科二十三回にして其の數二百十三名啞生の卒業は二十一回百五十八名なり、而して盲卒業生中二十三名は死亡せしも現在京城帝國大學病院及道立醫院に「マツサージ」技工として在職中の者五名は月額三十一圓五十錢より四十五圓の支給を受け尙勤務後自宅にて十數圓の收入あり、又都市にて自營せる者は月收少きは二十五圓多きは九十圓の收入ありて何れも相當の生活を爲しつゝあり尙教職に従事する者二名上級學校在學者二名あり。

啞生の卒業生百五十八名中二十一名死亡し、其の外は現に洋服裁縫自營又は洋服店の職工及徒丁となりて二十圓より五、六十圓迄の月收あり、其他諸種の業務に従事せり、卒業生の就職に付ては可及的斡旋を爲し尙且彼等の指導啓發の必要が動機となりて一般盲啞者の慰安善導の爲め大正十年三月初旬盲啞協會を組織せり年四回の會報を發行し時々講習會、慰安會、名士の講演會等を催し毎年四月には總會を開くこととせり其他卒業生に對しては便宜學校を訪問せしめ又は互に交通をなさしめ京城府内の卒業は儀式日には可成參席せしめつゝあり今卒業生の狀況を表示すれば左の如し。

卒業者狀況表

盲生科

醫院	技工	教員	鍼按自營	上級學校入學	死亡者	計
	五		二	一八一	二	二三
						二二

合 計	寄 附 金	寄 附 金	寄 附 金
	寄 附 金	寄 附 金	寄 附 金
	六〇〇〇.〇〇	六〇〇〇.〇〇	六〇〇〇.〇〇
	六〇〇〇.〇〇	六〇〇〇.〇〇	六〇〇〇.〇〇
	六〇〇〇.〇〇	六〇〇〇.〇〇	六〇〇〇.〇〇
	一〇,五〇〇.〇〇	一〇,五〇〇.〇〇	六二八

歳入豫算中寄附金は李主職より寄附せらるゝ年額六千圓なり而して大正十四年三月二十八日法律第十九號に依り朝鮮醫
院及濟生院特別會計は大正十三年度限り之を廢止せられ従來の濟生院資金並大正十三年度の歳入出豫算の殘餘及債權債務
は之を朝鮮總督府特別會計に歸屬せしめられたり。

二 支 出

昭和十二年度歳出決算

社 會 事 業 施 設 費	款 項	日	節 節	決 算 額	決 算 額		
					養 育 部	盲 啞 部	庶 務 課
俸 給	俸 給	俸 給	主 事 給	九三、四一九.二〇	五、一七六.三二 ^甲	三三、九四四.八三 ^甲	六、七〇八.〇七 ^甲
				奏 任 給	二四、一七五.五〇	七、四六〇.三三	一三、〇九二.一九
判 任 給	判 任 給	判 任 給	訓 書 導	四四、九七九.八	二、一八七.九八	二、一〇〇.〇〇	
					四四、九七九.八	二、一八七.九八	二、一〇〇.〇〇
				一四、八三八.五三	三、七三九.三四	八、五四九.一九	二、五四九.九九
				二、五四九.九九	—	—	—
				一、二二八.五三	三、七三九.三四	八、五四九.一九	二、五四九.九九

昭和十三年年度歲出豫算

款	項	目	節	豫算額	摘要			
社會事業施設費	俸給	奉任給		九八九五四〇〇				
				二七、九二〇〇				
				六〇、七六〇〇				
				三、二八三、〇〇				
				濟生院費	賞與	四八、三九〇〇	一、五三三〇〇	一〇、七三〇〇
				雜給費	給與	六八、二四三、七〇	四四、三〇五、九九	三〇、八五〇、〇八
				旅費	修繕費	二〇、四五九、三	七六、八九三	五〇、三三六
				接待費	旅費	二、五六四、六七	一、四八六、一	一〇、九六〇、六
				接給費	旅費	一、四一四、七六	七五〇、七七	五、六六五〇
				教養費	給與	三三八〇	二、五〇	一〇、三〇
	給與	一一、四九一、〇五	一、八三三、三〇	七、四五四、九一				
	給與	二、九六八、〇〇	一〇〇、〇〇	二、八六八、〇〇				
	給與	六〇、八四〇、〇〇	一、五二八、〇〇	二、八四九、〇〇				
	備人料	一、四五九、五四		一、三三七、四〇				
	宿舍料	七四一、六〇		四七七、六〇				
	被服費	四三六〇		三、二八〇				
	雜費	一九四三、一		一、六三一、一				
	雜費	五〇、七〇四、四九	三、九四九、二九九	一一、二一、五〇				

内地人	院	長	主	事	書	記	訓	導	囑託員其他	合	計	朝鮮人
								三七				
										五		
											一六	
											九	

濟生院職員 (昭和十三年三月三十一日現在)

款	項	目	節	豫算額	摘要
	濟生院費	廳修繕費 內國旅費 接待費 雜給及雜費		七,042.00	
	教養費		給與	二,037.00	
			給與	二,594.00	
			給與	二,602.00	
			給與	101.00	
			給與	二,695.00	
			給與	二,100.00	
			給與	六,300.00	
			給與	一,678.00	
			給與	1,080.00	
			給與	100.00	
			給與	四,170.00	
			給與	五,197.00	

第五章 關係諸規程

一 朝鮮總督府濟生院官制

(明治四十五年三月
勅令第四三號)

第一條 朝鮮總督府濟生院は朝鮮總督の管理に屬し孤兒の教育及盲啞者の教育に關する事務を掌る

第二條 濟生院に左の職員を置く

院長

主事

書記
訓導

專任 二人

奏任

專任 十四人

判任

第三條 院長は朝鮮總督府高等官を以て之に充つ

院長は朝鮮總督の指揮監督を承け院務を掌理し部下の職員を監督す

第四條 主事は院長の命を承け院務を掌る

第五條 書記は上官の指揮を承け庶務に従事す

第六條 訓導は上官の指揮を承け授業に従事す

第七條 濟生院は必要に應じ分院を設くることを得

附 則

本令は明治四十五年四月一日より之を施行す

二 朝鮮總督府濟生院規則

總 則

第一條 朝鮮總督府濟生院に養育部、盲啞部及庶務課を置く

養 育 部

第二條 本部は扶養者なき孤兒を教養保育し生活に必要な智識技能を授け自活の途を得せしむるを目的とす

第三條 院兒は院内に收容養育すべし但し養育上必要と認むるときは里預けとなすことを得

保育料里預けの條件は院長之を定む

第四條 年齢八歳以上の院兒には學業を授く

第五條 學科目は修身、國語、朝鮮語及漢文、算術、日本歴史、地理、理科、唱歌、體操、圖畫、手工、裁縫及手藝並實

業に關する科目とす

手工及實業科目は男兒に、裁縫及手藝は女兒に課す

第六條 修業年限は四箇年とす

課程、教授日數及每週授業時間は院長之を定む

第七條 學年は四月一日に初り、翌年三月三十一日に終る

第八條 學年を分ちて左の三學期とす

第一學期 四月一日より八月三十一日迄

第二學期 九月一日より十二月三十一日迄

第三學期 一月一日より三月三十一日迄

第九條 休業は左の如し

四方拜 元始祭 紀元節 春季皇靈祭 神武天皇祭 天長節 秋季皇靈祭

朝鮮總督府始政紀念日 神嘗祭 明治節 新嘗祭 大正天皇祭 日曜日

夏季休業 七月二十一日より八月三十一日に至る

冬季休業 十二月二十九日より翌一月五日に至る

學期末休業 三月二十六日より三月三十一日に至る

前項の外特別の事由に依り必要ありと認むるときは院長は朝鮮總督の認可を受け臨時休業を爲し又は夏季休業若くは冬季休業の期日を變更することを得

第十條 學科を修了したるときは卒業證書を付與す

第十一條 年齢八歳以上の院兒には學業の外作業を授く

第十二條 四年の學科を修了したる院兒は農事に従事せしめ又は農商工業者に託して其の職業を習得せしむ但し院兒の健康又は發育の状態に依り院長に於て勞働に適せずと認むる者は此の限りに在らず

學業を修了せざる院兒と雖特別の理由あるときは前項に準ずることを得

第十三條 院兒を雇傭せむとするものあるときは院長は其の身元職業等を調査し院兒をして將來自活の途を得せしむるに適當なりと認むるときは其の申出に應ぜしむることを得

第十四條 院兒養子縁組又は婚姻を爲さむとするときは院長は養親又は配偶者の身元性行職業等を調査し適當なりと認めたるときは之に同意することを得

第十五條 院兒獨立の生計を營み得るに至りたるときは退院せしむ

第十六條 院長は院兒に對し譴責謹慎及課役の處分を爲すことを得

盲 啞 部

第十七條 本部は盲者及瘡啞者に普通教育を施し其の生活に適當なる技能を授くるを以て目的とす

第十八條 生徒を分ちて給費生及自費生と爲す給費生は總て寄宿せしむ

第十九條 盲生の教科目は修身、國語、朝鮮語、算術、鍼按及體操等とす

第二十條 瘡啞生の教科目は修身、國語、朝鮮語、算術、手藝及體操とす

第二十一條 修業年限は盲生科に在りては三年、瘡啞生科に在りては五年、盲速成科にありては一年とす

第二十二條 第六條第二項及第七條乃至第九條の規定は盲啞部之を準用す

第二十三條 本部に入學し得る者は盲生に在りては年齢十二年以上瘡啞生に在りては年齢十年以上とす

第二十四條 入學志願者は其の父兄親族又は身元確實なる者一名の連署を以て毎年三月十日迄に入學志願信を差出すべし

第二十五條 入學を許可せられたる者は保證人一人と連署の上在學證書を院長に差出すべし

前項の保證人は成年以上の男子にして獨立の生計を營む者たることを要す

第二十六條 半途退學せむとするときは其の事由を記し出願人及保證人連署して退學願書を差出すべし

第二十七條 院長は教育上必要と認めたるときは戒飾又は停學を爲すことを得

第二十八條 院長は左の各項の一に該當する生徒に對し退學を命ずることを得

- 一、性行不良にして改善の見込なしと認めたる者
- 二、疾病又は能力劣等にして成業の見込なしと認めたる者
- 三、正當の理由なくして引續き一箇月以上缺席したる者又は出席常ならざる者

庶務課

第二十九條 庶務課は會計及庶務を掌る

附則

本令は發布の日より之を施行す

三 濟生院養育部孤兒收容に關する件

貴院養育部は遺兒棄兒迷兒等扶養者なき可憐な孤兒を收容養育すべきは勿論の義に候へ共現に乞丐の群に投じ又は乞丐を常習とする不良兒にして院兒に悪感化を興ふるの虞ある者は收容の限りに無之候條右に據り御取扱相成可然此段及通牒

候也。

四 朝鮮總督府濟生院兒從業給與金規程

第一條 農事に従事する院兒には從業給與金を支給することを得

第二條 從業給與金は左の事項を斟酌して其の額を査定すべし

一、作業の種類及難易

二、作業の實績

三、從業の時期及時間

四、勤務の狀況及品行

第三條 從業給與金は毎年三月末日に於て院長之を支給す

第四條 從業給與金は濟生院農場に於ける生産品拂下により收入したる金額を限度とす

第五條 院兒所有金は郵便貯金とし貯金通帳は院長之を保管し退院の時交付すべし

第六條 本規程の施行に關する細則は院長之を定む

附 則

本令は公布の日より之を施行す

五 朝鮮總督府濟生院兒從業給與金細則

第一條 農場收容院兒にして作業に従事する者には從業給與金を支給す

第二條 農場主任は毎月五日迄に前月に於ける院兒の作業成績を左記事項に依り調査し院長に報告すべし

一、作業の種類 二、従業時期及時間 三、作業の實績

四、勤務の状況及品行 五、其の他參考となるべき事項

第三條 院長は毎月院兒の作業成績を考查し翌月二十七日迄に院兒に之を知らしむ

第四條 院長は其の年度に於ける農場生産高を調査し院兒の作業成績に對照し従業給與金額を定む

第五條 農場收容院兒に付きては別紙様式に依り作業名簿を調製し院兒の姓名、出生年月日、農場收容の年月日並第二條

第二項の各號を記入すべし

(様式略す)

昭和拾參年朝鮮總督府濟生院事業要覽〔終〕

昭和十三年十一月十二日印刷
昭和十三年十一月十五日發行

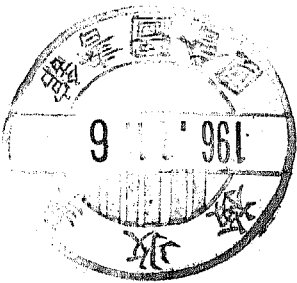
朝鮮總督府濟生院

京城府本町四丁目一三一番地

印刷人 谷 岡 貞 治

京城府本町四丁目一三一番地

印刷所 谷岡商店印刷部



製造濟廿年九月拾貳日

請求濟廿年九月拾貳日

受取濟廿年九月拾貳日

昭和卅廿年九月拾貳日

記入濟廿年九月拾貳日

廿年九月拾貳日

調査濟廿年九月拾貳日

昭和卅廿年九月拾貳日

引合濟廿年九月拾貳日

昭和廿年九月拾貳日

支拂濟廿年九月拾貳日

昭和拾廿年九月拾貳日